

月刊

2015

4  
月号

# みんぱく

特集

## 野次と喝采



応援文化論序説 丹羽典生 ☆ 大学応援団のパフォーマンス 岩谷洋史  
応援歌の御利益 木村裕樹 ☆ 女子応援の登場とその行方 吉田佳世  
宝塚ファンの愛と組織力 宮本直美 ☆ 共振する球場 高橋豪仁  
二・五次元のリアリティ 織田竜也

# 心の庭

箱庭をつくる機会があった。女性誌の企画で箱庭療法を手がける心理療法家と対談し、つくってみないかと誘われたのだ。公開されるものなので手が動くだろうかと思心配したが、いざ砂箱に向き合ってみると雑念は消え、体が自然に柵へと向かった。

柵には小さな玩具が並んでいた。人形や家や怪物、マリア像や電車などさまざまな種類がある。箱の底は青く塗られており、砂をかき分けると海や川を表現できる。川に橋を渡すこともできるし、船を浮かべることもできる。玩具が箱を飛び出してもかまわないし、箱を二つ並べてもいい。すべて自由だった。

私はあまり深く考えず、直観的に玩具を置いた。血の池、砂の中からのぞくいくつもの手、野蛮な部族、彼らに追いつめられて泣き叫ぶ女性と子ども。背後には彼らを狙う大蛇がいる。ここまでつくってふと緑が欲しくなり、木や草を置いた。

「緑を置かれたのでほっとしました」。先

## 最相葉月

プロフィール  
1963年東京生まれ。ノンフィクションライター。関西学院大学法学部卒業。著書に『絶対音感』（小学館）、『ノンフィクション大賞』、『星新一』（大佛次郎賞）、『講談社ノンフィクション賞等』、『セラピスト』（以上、新潮社）、『調べてみよう、書いてみよう』（講談社）、『青いバラ』、『れるられる』（以上、岩波書店）など。新刊『ナグネ 中国朝鮮族の友と日本』（岩波書店）。

生がいった。「気遣いの木です」。思わず本音が漏れた。その雑誌におどろおどろしい箱庭は似合わない。「心の庭」というおしやれなテーマであるし、これでは編集者が困るだろうと思いい、緑で中和したのだ。

私がつくったのはこの世の地獄だった。このところ中東やアフリカで続くテロや大虐殺の光景が頭から離れず、本を読んでいても、親しい友人と一緒にいても、心底染しめずにいた。みなさん同じように感じていると思います。……とつぶやくと、先生は「いや、感じない人もいます」といわれた。

翌日、二人の日本人がテロリストに拘束されたことが報じられた。世界における日本の立ち位置が大きく揺さぶられた瞬間だった。私の心はこの事態に共振していたのか。

心の庭は正直だ。体裁を繕ってもすぐばれる。果たして雑誌は私の庭を掲載するのだろうか。いや、そもそも人の心を覗く（のぞ）くなんて恐ろしい企画をたてたほうがわるいのだ。

## 月刊 みんぱく

4月号目次

- 1 エッセイ 千字文  
心の庭  
最相 葉月

### 特集 野次と喝采

- 2 応援文化論序説  
丹羽 典生
- 4 大学応援団のパフォーマンス  
岩谷 洋史
- 5 応援歌の御利益  
木村 裕樹
- 6 女子応援の登場とその行方  
吉田 佳世
- 7 宝塚ファンの愛と組織力  
宮本 直美
- 8 共振する球場  
高橋 蒙仁
- 9 二・五次元のリアリティ  
織田 竜也

- 10 集めてみました世界の〇〇

太鼓編  
福岡 正太

- 12 みんぱく Information

- 14 味の根っこ  
クスクス（前編）  
二村 淳子

- 16 文化遺産おもてうら  
文化遺産としてのものづくり  
——マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識  
飯田 卓

- 18 音の居場所  
自分たちの故郷の祭り  
砂川 秀樹

- 20 人間学のキーワード  
モラル・エコノミー  
中川 理

- 21 次号予告・編集後記



上：第五高等学校（現・熊本大学）の文科理科対抗ボートレースの応援風景。昭和14（1939）年ごろ、江津湖にて  
下：ボートレース前日には、市中へ繰り出した五高生による大規模な街頭行進がおこなわれた。幸島公園付近より新市街を望む。昭和10（1935）年ごろ。写真は上下ともに熊本大学五高記念館の提供



応援にかかせない太鼓。広島大学応援団のものには、大学のシンボルである不死鳥（フェニックス）の文字が書かれている

思つて人間が敵と味方にわかれて何かを競い合えば、野次と喝采が交差する空間が生まれるのは、普遍的なことかもしれない。議会の与野党の対立はもとより、オリンピックやスポーツ大会というと、むやみやたらに盛り上がる人が出てくるのは、そうした遺伝子（いでんこ）のなせるわざである。しかし同時に、そこに集つて人びとのありように目を凝らすと、何やら文化的といいたくなるような、お国柄が見えてこなくもない。応援団もかつては野次隊とよばれたことがあったように、声援と怒号の飛び交う場の一員であった。ところが今では、観客やスタジアムの統制に一役買っている。応援の日本的な特徴には、何かまとまりを好む側面があるのだろうか。今回の特集では、応援やファンの集まりについて紹介することで、応援と日本文化の特徴についてみていきたい。

**他人のためにする活動の広がり**  
そもそも他人を応援するという行為はスポーツの声援に限らない。ちよつとした手助け、募金から、ボランティアまでは幅広い。必ずしも相手の利益となるのか、はつきりしていない。なぜかせずにはおられないのが、人間の性ではないだろうか。さらに文化論の視点から興味深いのは、声援を送るのが個人とは限らない点である。なぜか人は集まつてエールを送るのだ。  
大学や野球の応援団は、応援する組織の代表例であろう。戦前の日本の学生文化のなかで生まれた大学応援団やプロ野球の応援におけるパフォーマンスや歌の使われ方は、外国人から奇異の目で見られることがあるように、異彩を放っている。ただし、いかにも男性的応援スタイルは、時代の流れのなかで変貌を余儀なくされつつある。  
そして何らかの他者やモノに熱を上げるという意味で応援の世界は、ファン文化とも地続きである。ジャパニメーションともよばれる日本のアニメやマンガとそのファンの独特の行動は、日本研究者の格好の研究対象となっている。本特集では、こつした切り口から、新しい現象に見えるかもしれないが、意外と古いかもしれない応援の姿を通して、日本文化の何かが見えてくれば幸いである。

### 応援する遺伝子

味方のチームの活躍には、メガホンを打ち鳴らし、歓声を上げる。ファインプレーには拍手喝采。相手チームの活躍には、野次を飛ばす。チームごと、場合によっては選手ごとの特別な演奏が割り振られ、試合まわりのあれこれから客席まで応援団によって統制される。日本の野球、サッカーなどのスポーツの現場では、日常の一幕である。

## ★ 応援文化論序説 ★

丹羽 典生 にわ のりお 民博研究戦略センター



応援団のシンボルである団旗。神聖な備品として取り扱いも要注意である。2013年4月3日、神戸大学の新生歓迎会にて（撮影・岩谷洋史）

特集

# 野次と喝采

人のために何かをすること。  
支えること、励ますこと。

★ ありふれたことに見える応援には、  
文化的違いもある。

この特集では、応援団、チアリーダー、  
応援歌、プロ野球応援など、  
日本の応援文化の独自性は  
何かを考えてみたい。

# ★ 大学応援団のパフォーマンス ★

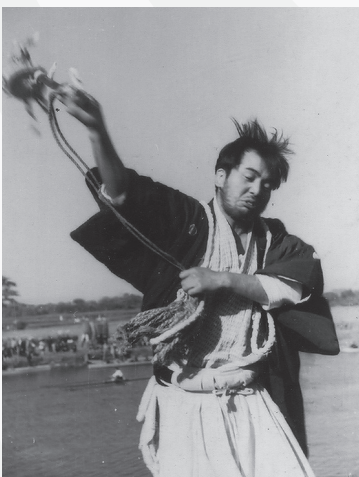
日本の大学応援団は独特のパフォーマンスがある。披露される場面は大別して、スポーツ試合と、大学祭や大学応援団が参加する演舞会のステージがある。それらは、日常的な場では決して見られない、独特な語勢による発声や特徴ある身振り手振りからなる。初めて見たときには、目が覚めるような衝撃を受けた。

## 祝祭的な空間へ

スポーツの試合では、攻守交代に沿って、パフォーマンスが繰り広げられる。アメリカンフットボールなど日本人になじみの薄いスポーツの



上：神戸大学応援団によるアメリカンフットボールの試合の応援。熱がこもった応援が繰り広げられる。2013年12月8日  
右：第五高等学校(現・熊本大学)の文科理科対抗ボートレースの応援風景。長い紐がついた采配を勢いよく振り上げる。昭和16(1941)年ごろ、江津湖にて(提供・熊本大学五高記念館)



## 岩谷 洋史

立命館大学非常勤講師 / 民博 外来研究員

応援でも大丈夫。応援団を通じて観客はどの瞬間に声援を送ればよいかわかる。また、音楽には流行歌が取り入れられ、親しみやすい。スポーツ試合の応援は、味方チームの応援と同時に観客の応援への参加を促すのだ。

パフォーマンスの中心は男性のリーダーである。リーダーは、手旗番号や手の動きや空手の突きを彷彿させる力強く俊敏でリズムカルな動きを繰り返す。こうした身振り手振りは、女性のチアリーディングや吹奏楽部の演奏と重なり合うことで、場に賑やかさと華やかさをもち、試合の単なる観戦をこえて、観客を祝祭的な空間へと誘う。

## 厳粛な舞い

それらに対して、おもにステージの場において演じられるパフォーマンスは、応援団が主役となる演舞とよばれるタイプである。大学によっては、男性団員だけに継承されるなど特別な位置づけがなされている。

音楽に旧制高校時代の寮歌を受け継いでいるタイプもあり、スポーツ応援の動きとは起源も見た目も際違って異なる。太鼓のリズムとともに、瞬間瞬間に気迫のある声を発しながら、身体全体をゆっくりと動かすような動きがある一方で、全身全霊で激しい拍手を続けたり、小刻みに手首だけを震わせたりする動きなどもある。スポーツ試合時と著しく異なり、重々しさや厳粛さも見てとれる。

こうした応援団のパフォーマンスは、筆者の知る限り、他国では見られない、日本独自に発展してきたひとつの文化といえよう。

# ★ 応援歌の御利益 ★

木村 裕樹 龍谷大学非常勤講師

## 花は櫻木、人は武士

応援歌とは学生の応援団員が、さまざまな場面で使用する歌の総称である。大学の応援団ホームページや記念誌を手がかりに、五〇〇曲近くの応援歌を集めてみると、そこには校歌を筆頭に、応援歌、学生歌、国歌、寮歌、追遥歌、部歌、記念歌、愛唱歌、讃歌、放浪歌、会歌、小唄、節、音頭、教え歌などがあり、かつての学生たちは、こんなにも歌っていたのかと驚嘆させられる。このように応援歌には今の大学の形に至るまでの歴史を背負った歌が含まれている。

応援歌の歴史は学生スポーツの歩みと軌を一にしている。そのはじめは明治三三(一八九〇)年、第二高等学校(現東京大学、以下一高)と東京高等商業学校(現一橋大学)とのボート競技において、一高側の声援隊が歌った端艇部(ボート部)の部歌「花は櫻木」である。これは部員の赤沼金三郎が作詞したもので、最初の寮歌といわれている。メロディーは民謡調の短い旋律の繰り返しであるが、四六行もある七五調の歌詞には一高生の誇りとボート競技の情景が詠みこまれており、勇壮さとともに爽快さも感じられる。結果は第一高等学校の勝利であった。

## 勝利を呼び込む応援歌

続く応援歌の登場は野球の早慶戦である。明治三八(一九〇五)年、早稲田大学の「敵軍如何に」(橋静 作詞)と明治三九(一九〇六)年、慶應義塾大学の「天は晴れたり」(桜井弥 郎作詞)がそれであるが、前者は軍歌「敵は幾万」、後者は文部省唱歌「ワシントン」の替え歌であった。早慶戦は両者の過熱した応援が災いして、一時中断となるが、大正一四(一九二五)年に復活する。このとき、劣勢であった慶應が勝利



第五高等学校(現・熊本大学)におけるもっとも有名な寮歌「武夫原頭」(ぶぶげんとう)。「武夫原」とは運動場のことで、写真はその歌詞とともに、武夫原から校舎方面を望んでいる。大正14(1925)年ごろ(提供・熊本大学五高記念館)



応援歌「紺碧の空」の記念碑『キャンパスがミュージアムvol.1《早稲田キャンパス編》』(編集発行・早稲田大学文化推進部、2014年)より転載

の悲願達成のため、昭和二二(一九二七)年に発表したのが、「若き血」である。これは洋行帰りの新進作曲家、堀内敏三に作詞作曲を依頼したもので、従来の軍歌調を打破した斬新なメロディーであった。歌唱指導には当時、普通部に在籍した増永丈夫、後に国民的歌手となる藤山一郎が当たった。その甲斐あつてか、慶應は早稲田に見事勝利する。一方の早稲田はしばらく低迷するが、この沈滞した鬱陶気を払拭するため、昭和六(一九三二)年、「若き血」に対抗して作られたのが、六番目の応援歌となる「紺碧の空」である。歌詞は学生から広く募集し、住治男の詩が選ばれた。作曲は当時、まだ若くて無名であったが新進作曲家古閑裕而が担当した。その力強いメロディーと歌詞が早稲田を勝利に導いたことはいままでもない。

応援歌は現在も生み出されている。新しいところでは、首都大学東京の「校歌」(平成二二(二〇〇九)年)、神戸大学の「ニューカレドンジング 光と風のハーモニー from Kobe」(平成三二(二〇二〇)年)がある。これらに共通するのは母校への愛である。応援歌を通して、愛校心に溢れた声援が勝利をもたらすのである。

# ★女子応援の登場とその行方★

よしだ つかよ  
吉田 佳世  
日本学術振興会特別研究員  
(神戸大学)

## キユート&アクロバティック

スポーツに応援はつきものだが、ことに大学スポーツにおいて、いまや女子学生による応援は欠かせないものとなっている。アメリカンフットボールのハーフタイムショーにもなれば、ミニスカートをはいたチアガールたちがキユートかつアクロバティックな演技でわたしたちを楽しませてくれる。日本の大学



神戸大学応援団による三部。2013年4月3日

において女子応援が普及するきっかけとなったのは、一九六〇年の東京六大学野球早慶戦のことであり、一九九〇年代ごろには一般化したといわれている。その間に応援スタイルもバトンからチアへと移りかわってきた。この女子応援は、女性の従属性を再生産するものとして批判を受けることもあるが、その内実をみてみると、組織の形態にいくつかのパターンがあり、カラーもさまざまである。なかでも、もともと男子学生による「応援団」があった大学では、女子応援はその一部に組み込まれる形で組織されてきた。ここでは、三部とよばれる男子応援(リーダー・女子応援(チア)・吹奏楽による混成演舞など、欧米文化の単なる輸入ではない、独自の応援スタイルが作られてきた。

## ジェンダーを横断する応援

スポーツに花を添えるということばのとおり、これまで女子応援といえば女らしさを強調するものが主流であった。しかし、近年、こうした応援のあり方に変化が生じている。二〇〇年ごろからいくつかの大学応援団では男子学生と同じように学ランを着る女子学生が現れ、凛々しく応援する(エールを切る)姿



神戸大学の大学祭(六甲祭)でエールを切る女子学生。2014年11月6日(撮影・岩谷洋史)

がみられるようになっていく。また、女子応援の定番であったチアも、それ自身が表現スポーツとして確立していくなかで、可愛らしさや華やかさばかりでなく、技巧に重きをおいた迫力ある演技が追及されるようになってきた。その結果、男女混成や男子学生のみチームが結成されるなど、こちらでは反対に男子学生の参加がみられるようになっていく。これらは応援にみられるジェンダー区分が乗り越えられようとしている動きとして捉えることができる。今後、スポーツ応援はどのように展開していくのだろうか。試合の行方だけでなく、こちらの行方からも目が離せない。

# ★宝塚ファンの愛と組織力★

みやもと なおみ  
宮本 直美  
立命館大学教授

と見えてくるのは熱狂よりもむしろ合理性である。

じつは「宝塚ファン」の特徴として語られるものの多くは、個人としてのファンではなく、ファンクラブという組織の行動である。非公式ながら、宝塚歌劇ではおもなスターにそれぞれファンクラブが存在し、それらが連携して公演全体を支えている。劇場前に並んでいる集団はファンクラブの会員である。もともとは、それこそ「熱狂的なファン」に囲まれてもみくちゃにされるスターを一部がファンを守るために輪になって囲い始め、それが徐々に人垣を作ってスターの通る道を確保するという「ガード」に変容した。劇場前のこの光景の変化が示すのは、バラバラな個人ファンが集まるなかで、自主的にルールが定められ、組織化された過程である。ガードではファンはスターを撮影したり、スターに勝手に近づいたりすることは禁じられている。

するための目印であると同時に、どのスターにどれだけのファンが集まっているかという人気を競わせる役割をも果たしている。ファンは好きなスターの人気を高めるために、ファンクラブのルールに従う。そこにあるのはスターへの溢れる愛情表現というよりは、個人の思いを相互に抑制しつつ、組織内の役割を果たすことでスターの後方支援をするという、まるで会社員のような応援といえるだろう。数千人が集まる、熱い、場でありながら、ファンの動きはきわめて組織的で合理的である。——というのが宝塚ファンの特徴なのである。



東京宝塚劇場前。前列で座っている人びとがガードで後ろに立っているのは一般のファン

## 熱狂より合理性

「宝塚ファン」といえば、劇場周辺で整然と並んでスターを待つ光景がイメージされるのではないだろうか。そこにいるのは熱狂的なファンだと思われがちだが、よく観察する

## 会社員のような応援

ガードではファンクラブごとのお揃いの服や小物を身につけて参加するのがルールであるが、それはスターへの愛情の証ではなく、ガードの人垣のなかでファンクラブを識別す



宝塚大劇場

# ☆ 共振する球場 ☆

たかへし ひでさと  
高橋 豪仁

奈良教育大学教授

## 筋書きのあるドラマ

プロ野球では、一九八〇年代になると、それまで内野スタンドで活動していた私設応援団が外野スタンドに移動し、一般客を巻き込んで応援するようになった。どの応援団も共通してゲーム前の「一九」（イチク）  
という、スターティングメンバーのヒットイングマーチ―選手別応援歌を打席順に一回ずつ奏する）、攻撃時の選手毎のヒットイングマーチ、好機や得点時の応援、勝利後の応援（二次会）といふ等をおこなう。スワローズの雨傘踊り、カープのスクワットコール、マリーンズの上下ジャンプ、ホークスのメガホンダンス等、チームに特有の応援方法もあるが、それらはすべて野球独自のゲーム展開に即したものであり、ゲーム状況



上：神宮球場ライトスタンド。中央は、私設応援団「ツバメ軍団」  
団長 故 岡田正泰さん。1987年7月7日  
下：旧・広島市民球場。2008年6月8日

## 儀礼としての応援

プロ野球の応援は、ある特定の状況下で固有の秩序だった様式をもつという儀礼の特徴を有している。例えば、自チームの選手がヒットを打ったとき、打者がベースにたどり着き、一呼吸おいて、リードの団員が「ビー」と長めの笛を吹く。これを合図にヒット用の曲を吹き始め、観客はメガホンを打ち鳴らす。目の前で展開されているプレーに即応して、応援団員同士が阿吽の呼吸で応援をリードし、それに大勢の観客が身振りや声を合わせるのだ。プレーヤーの動きやゲーム展開と応援団・観客の応援が同時に交差しながら、応援団を含む観客同士の身体が共振し、集団的沸騰状況に至るのである。

甲子園球場のタイガースファンがメガホンで打ち鳴らすリズムの基本形は、「バゴツ、バゴツ、バゴバゴバゴ」である。これを早くすれば「ニッポン、チャチャチャ」のリズムになる。このリズムは、日本各地で冬至前後の夜におこなわれる農耕儀礼で用いられるビンザラという楽器で奏されるリズムと一致している。応援において、豊穣を願う農耕儀礼と同じように、勝利を願い、自分のチームを勝たせよとする、日本の神話的思考に基づいた呪術的な行為が表出しているのかもしれない。

# ☆ 二・五次元のリアリティ ☆

おだ たつや  
織田 竜也

長野県短期大学准教授

デジタルコンテンツはメディアミックスによって膨らみをもつ。アニメや映画やゲームは、原作のテキストとイメージを基にして創造される。詩にメロディが添えられることで歌が流れるように、キャラクターは輪郭をもち、声を発し、アニメイトされて動き始める。デジタルゲームの魅力は、創作世界を鑑賞するだけでなく、機器を介して作品に没入することにある。二次元の世界は三次元に生きる人類にとって、もはや向こう側の世界ではない。身体感覚を接合させるサイボーグ化によって、二・五次元はリアルな経験となる。

デイズニアアニメを二・五次元に引き寄せた東京デイズニアランドが三〇年以上も人気を博すのは、創作世界に参入する楽しみを日本人が積極的に受容したことを示す。参入の一般的な手法はコスプレである。コスプレは英語圏でCOSPLAYとよばれて、世界的な広がりをもつに至った。衣装やメイクを工夫することで二次元のキャラクターが受肉する。そこは同時に、日常の退屈な自分を別の人格に変容させ、趣向を共有する仲間たちと出逢うカーニバル的な祝祭の時空でもある。作品の舞台や縁のある場所を訪問する舞台探訪は、近年では特に聖地巡礼として注目を集めている。観光現象としてはコンテンツ

リズムに分類されるが、絵馬にキャラクターを描いて神社に奉納する「痛絵馬」など、創作世界と民俗宗教は親和性が高い。目に見えない別次元の世界を存在させるという意味で、類似した思考構造をもつためだ。独自の追体験を求めるファンは、作品のスピノフやオルタナティブを二次的に創作する。貴重な交流空間コミックマーケットが年

中行事的に開催され、やはり祝祭性を帯びた空間となる。デジタルコンテンツのファンは自分の経験を創作世界に接合させて、二・五次元の世界に生きることを希求する。それは彼らにとって、作品への応援に他ならない。



海外でのCOSPLAY



木崎湖(長野県)での巡礼バスツアー



### ポルトガル

木の枠を革で包み込み縫い合わせた太鼓アドゥーフエ。両手で太鼓を支えて、指先で膜面を打つ。太鼓の膜面はまるいことが多いが、アドゥーフエは四角や三角などの形が特徴的。音楽展示場にて公開中。  
H5.2 x W41 x D42  
H0150834

### 日本(大阪府)

河内音頭鉄砲節の音頭取り鉄砲光三郎(てっぽうみつさぶろう)が用いた大太鼓。こうした太鼓は、祖先の霊を供養することを目的とした盆踊りなどで打たれてきた。ピア樽形の胴の両面に鉄(びょう)で革を固定する。音楽展示場にて公開中。

H100 x W100 x D105  
大阪府立上方演芸資料館蔵



### 中国

ワイングラス形の胴をもつ片面太鼓。雲南省のタイ族の楽器で象脚鼓(ぞうきゃくこ)という。ひもで肩からかけ、踊りながら打つ。同種の太鼓は東南アジア大陸部にも広く見られる。中国地域の文化展示場にて公開中。  
H98 x W32 x D30  
H0268317



### イラン

ひざに楽器を横たえて、ひじでおさえ両手の指で打つ太鼓ドンバック。膜面の中央部分を打って「トム」という深い音、端を打って「バク」という高い音を出す。螺鈿(らでん)の細工が美しい。西アジア展示場にて公開中。  
H42 x W26 x D26  
H0000846



### コートジボアール

細長い円筒形の胴の片面に革を張った太鼓タムタム。底面に脚があり、胴にさまざまな彫刻がほどこされている。  
H106 x W31 x D34  
H0149345



### マリ

くびれた胴をもつトーキングドラム的一种タマンバ。右手に持ったバチと左手の指で打つ。わきにはさんで、両面の革を結び付けているひもを締めたりゆるめたりすることで音を変化させる。  
H36 x W19 x D19  
H0254636



### トルコ

円筒形の胴をもつ片面太鼓ダウル。このタイプの太鼓は、軍楽の楽器として西洋を経て日本にも伝わった。応援団が使う大太鼓もこの太鼓に由来する。トルコでは、肩からひもでかけ、太めのバチで大きく打ち、細いバチで細かなリズムを刻む。  
H38 x W54 x D53  
H0237192

### カナダ

浅い枠に革を張った枠太鼓。手に持って踊りながら打つ。東アジアから中央・北アジア、アメリカにかけて、こうした太鼓を打ちながら歌い、踊る伝統がみられる。  
H9.7 x W53 x D56  
H0219541



### 集めてみました世界の



福岡 正太 民博 文化資源研究センター

太鼓は、世界でもっとも広くみられる楽器のひとつだ。動物の革などを枠や胴に張り、打ったり、こすったりして音を出す。さまざまな音楽において、生き生きとしたリズムを生み出す源となっている。一方、ことばも違う多民族の軍隊に指示を与え、統率するために、巨大な帝国の軍楽には太鼓が欠かせなかった。雨をよび、神に祈り精霊と交わるために太鼓を打つこともある。わたしたちの身体をふるわせて遠くまで響く太鼓の音は、人間ばかりでなく、見えない存在をも動かすと考えられてきたのだろう。

※寸法の単位はセンチメートルです。

### インド

うつわ型の胴をもつ。高い音のタブラー(左)と低い音のパーヤーン(右)を組み合わせて、手のひらと指先を使って演奏する。鉄粉とでんぶんのペーストを塗り音を調整する。  
H32 x W23 x D24  
H0008724



### パプアニューギニア

2メートル以上ある円筒形の胴をもつ片面太鼓ディワカ。底面はワニの口の形に彫られている。かつては、男性の儀礼に用いられる神聖な楽器だった。音楽展示場にて公開中。  
H220 x W25  
H0124181



### キューバ

ラテンアメリカ音楽などに用いられる細長い樽形の胴の片面に革を張った太鼓コンガ。まるい枠に革を張り、上からたがをはめて締める。アフリカ起源の太鼓の系譜を引くと考えられる。音楽展示場にて公開中。  
H78 x W40 x D37  
H0196803



### インドネシア

ジャワの伝統的合奏音楽ガムランに用いる太鼓クンダン・アグン。同じタイプの小型の太鼓クティブと組み合わせて演奏することが多い。胴の両端の膜を革のひもで結び付けて締めている。  
H83 x W78 x D43  
H0006763

展示場リニューアルのお知らせ

3月19日(木)から南アジア展示・東南アジア展示があたりらしくなりました!!  
みんぱくでは、すべての展示場を順次、刷新していく計画を進めています。

**南アジア展示**

南アジアは、豊かな自然環境のもと、さまざまな宗教や文化、社会集団が共存しあう知恵を育んできました。信仰やくらしの技の多様性、独特の発展を見せる大衆文化や染織文化の展示をおおして、躍動する南アジアの姿を紹介します。



右からジャガンナート神、スバドラー神、バララマ神/インド

**東南アジア展示**

起源を異にする民族がさまざまな生活スタイルでくらす東南アジアでは、民族や文化が入り組み、異種混種の世界が広がっています。「東南アジアの1日」をコンセプトに、その多彩な文化を紹介します。



水上人形(漁師の夫婦)/ベトナム

**躍動する南アジア**——春から秋のみんぱくフォーラム2015  
新しくなった展示にあわせて、南アジアの躍動感あふれる姿を、さまざまな関連イベントを通じて紹介します。

**関連イベント**

**◆研究公演**

「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー」  
動くヨーガともいわれる、ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤーを鑑賞するとともに、講演を交えてネワール仏教、広くはネパール文化の一面に関する理解を深めます。  
日時 4月19日(日)13時30分～16時  
(12時30分開場)

会場 本館第5セミナー室(定員100名)  
※参加無料、事前申込(先着順)

**◆研究公演関連ワークショップ**

「ネパール仏教舞踊チャルヤーへのいざない」  
ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤーを体験し、身体の隅々をコントロールして自らが仏や神がみに近づくと修行の一端を体感します。  
日時 4月18日(土)11時～12時30分  
(10時30分開場)

会場 本館第5セミナー室(定員50名)  
※参加無料、事前申込(先着順)

**◆ワークショップ**

「忠実再現! インド西部の刺繍布」  
展示資料の模写に挑戦!

日時 5月24日(火)、6月7日(日)、28日(日)  
3回連続講座  
10時30分～16時(10時受付)  
会場 本館ナビひろばなど(定員12名)  
講師 上羽陽子(本館准教授)  
三尾稔(本館准教授) 6月28日のみ  
応募期間 4月10日(金)～5月10日(日)必着  
※参加費各回500円(別途要展示観覧券)、事前申込、中学生以上の刺繍経験者で全3回ご参加いただける方対象

**みんぱくゼミナール**

時間 13時30分～15時(13時開場)

会場 本館講堂

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は観覧料が必要です)

第443回 4月18日(土)

**10世紀の西アフリカに伝わった中国製磁器**

——アフリカから世界史を考える

講師 竹沢尚一郎(本館教授)



アフリカの大地に未知の世界が埋もれている

西アフリカの10世紀の遺跡で、私たちは中国製磁器片を発掘しました。海を越え、砂漠を越えて運ばれてきたこの白磁は何を意味しているのか。アフリカの歴史を世界史の中に位置づけることで、私たちの理解はどう変わるのか。そんな問いを考えたいと思います。

**みんぱくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう**

時間 14時30分～15時30分

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

4月5日(日) 本館ナビひろば

徹底解説!「トラジャの米倉」

話者 佐藤浩司(本館准教授)

4月12日(日) 本館ナビひろば

台湾客家——日本、アメリカへの移住

話者 河合洋尚(本館助教)

4月26日(日) 本館ナビひろば

身体でみる異文化——琵琶を持たない琵琶法師のアメリカ聴き語り

話者 広瀬浩一郎(本館准教授)

**企画展**

「岩に刻まれた古代美術——アムール川の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」



雪の中から浮かび上がるヘラジカ

会期 5月21日(木)～7月21日(火)

「極東ロシアのシカチ・アリヤン村には、考古学では世界的に有名な岩面画が残されており、先住民文化が聖なる遺跡として守ってきました。本展では現在見られるすべての岩面画を拓本と写真を用いて世界で初めて一斉に紹介します。」

みんぱく春の遠足・校外学習事前見学&ガイドランス  
春の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイドランスを開催します。新しくなった展示についても研究者が展示場で説明します。  
日時 4月3日(金)、4月6日(月)  
14時～16時30分(13時30分～16時受付)  
会場 本館第5セミナー室ほか  
お申し込み・お問い合わせ  
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。  
企画課 博物館事業係  
電話 06-6878-8210

**みんぱくミュージアムパートナーズ「点字体験ワークショップ」**

目で読む文字から手で読む文字へ。点字で異文化「コミュニケーション」を体験してみませんか。  
日時 4月11日(土)12時～15時30分  
会場 本館エントランスホール  
※参加無料、申込不要

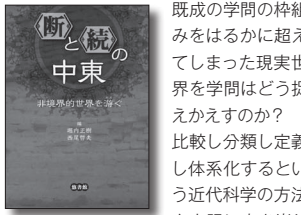
**●無料観覧日のお知らせ**

5月5日(火・祝)のこの日は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です。

**●みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)新規メンバー募集**

みんぱくミュージアムパートナーズは、みんぱくの博物館活動をサポートするため自主的な企画を運営する市民パートナーです。この度9月から活動する新しい仲間を募集します。定員に達し次第、受付終了です。  
応募期間 4月25日(土)～5月10日(日)  
お問い合わせ先  
みんぱくミュージアムパートナーズ事務局 平成27年度新規募集係(本館 社会連携室内)  
Email minpakumikyoku@dm.ninpaku.ac.jp  
※みんぱくホームページで詳細を確認の上、ご応募ください。

堀内正樹、西尾哲夫 編著  
『(断)と(続)の中東——非境界の世界を游(およ)ぐ』  
悠書館 3,600円(税抜)



新たな世界理解の方法を模索する、知の解体新書!

**刊行物紹介**

日高真吾 著  
『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』  
千里文化財団 1,800円(税抜)



東日本大震災の発生から四年。被災地では、現在もなお復興にむけた懸命な努力が続けられている。民俗文化財を中心としたレスキュー活動を続けてきた文化財科学者が、災害からの復興において文化財が果たす役割を明らかにし、文化財保存の意義について考察する。

**友の会**

**友の会講演会(大阪)**

会場 本館第5セミナー室(当日先着順、会員証提示)

第442回 5月2日(土)14時～15時10分

躍動する南アジアの背景にせまる

講師 三尾稔(本館准教授)

南アジア地域は「混沌と停滞」というイメージにつきまわってきました。しかし、インドを先頭にした目覚ましい経済発展が続き、今まさに南アジアは政治経済的にも文化的にも躍動の時代を迎えています。みんぱくの南アジア新展示もこれをテーマに構成しています。宗教や文化、生活様式など、さまざまな面での多様性を維持して共存する知恵こそが、今日の南アジアの躍動の秘密であることを本講演会で説明します。

●講演会終了後、新しくなった南アジア展示場を講師の案内のもと見学します。(1時間程度)

第443回 6月6日(土)14時～15時10分  
聖なる遺跡は物語る——アムール川の少数民族ナナイの神話を探る

講師 佐々木史郎(本館教授)

**東京講演会**

会場 モンベル渋谷店5Fサロン

定員 60名(要事前申込、会員無料、一般500円)

第111回 4月11日(土)13時半～15時

「氷の島に生きる人びと」

——グリーンランド・イヌイットの文化と歴史

講師 岸上伸啓(本館教授)

極北に位置する、世界最大の島グリーンランド。全島の8割を厚い氷床が覆つこの「氷の島」では、人口の9割をイヌイット系の人びとが占めています。海域の狩猟と漁業を基盤に、寒冷な自然環境に適応した生活を営むグリーンランド・イヌイットとはどのような人びとなのでしょう。また、地球規模の環境問題やグローバル化本国デンマークとの関係は、彼らにどのような影響を及ぼしているのでしょうか。彼らの文化と歴史、そして現在の様相を併せて紹介します。

●講演会終了後、会場を移動して、展覧会「スピリチュアルグリーンランド」(12ページ参照)の見学を予定しています(1時間程度)。



# 味の根っこ

自由、平等、そして、

## クスクス (前編)

二村 淳子 にむら じゅんこ ライター／比較文化研究者



サフランやクミンのパウダーとパプリカを入れたクスクス

### フランスの国民食

一言でいえば、クスクスは、「携行できる粒パスタ」だ。クスクスの「粒」は、セモリナ(硬質小麦の粗粒状のもの)をフラワー(きめ細やかなサラサラな小麦粉)でコーティングし、丸め、乾燥させたもの。糖のように水を加えるだけで食すことができる携行食でもあるのだが、構造的には、スパゲッティなどと同じパスタである。

このクスクスを使った料理は、マグレブ(北アフリカ)で常食されているが、今やフランスの国民食としてもすっかり定着した。一九九八年の統計によれば、クスクスはフランス人が二番目に好きな料理で、実際、ステーキの次に食べている料理でもある。周囲を見渡せば、ピストロや学校給食はもちろんのこと、離乳食にもなっており、冷凍料理、缶詰、デリバリーサービスもある。家庭の日常にすっかり浸透しており、まさに現在フランスを代表する料理なのだ。

### いつから食べ始めたか

一体、いつからフランス人はクスクスを食べるようになったのだろうか? じつはかなり古く、グラタンやシチュー(いずれも一八世紀の発明)以前に遡る。フランソワ・ラブレール(一四四三―一五五三)の奇書『パンタグリユエル 第五之書』にも登場しており、ラブレールによれば、クスクスは、当時の南仏(イベリア半島のイスラーム文化の影響が濃かった)の名物料理だった。

人が本国へと戻ってきた。お手伝いさんの作るクスクスを物心つく前から食べていた彼らにとつてのソウルフード。忘れることはできない。 **回結と友愛のクスクス** マグレブでは、クスクスは、聖なる日・金曜日の食べ物だ。家族だけではなく、貧しい人、恵まれない人にもクスクスを分け与えるため、寺院などにクスクスを届ける習慣がある。クスクスもつこうした連帯の精神はフランスでも健在だ。パリでは、毎週金曜日にクスクスを無料で食べることができるカフェが数件ある。わたしも、留学時代に無料クスクスのお世話になったのだが、「どうして無料なの?」とお店のギャルソンに聞くと、「俗にいう、クスクス・ソリダリテ(連帯クスクス)」ってやつさ。クスクスは皆で一緒に食べられるだろう? キリスト教徒でも、ムスリムでも、ユダヤ人でも、



にんじんと牛肉料理がのったクスクス

君のようなアジア人でも」と教えてくれた。かつての北アフリカでは、異教徒間でもめ事があると、クスクスを囲んで関係修復をする習わしがあったという。どうやら、この料理は異民族共生のシンボルだったようだ。彼が教えてくれた「連帯クスクス」ということも印象に残った。このことは、マグレブからの移民二世たちによく使われていることばだが、人と人をつなげてくれるクスクスの性質をよくあらわしていると思う。日本の「炊き出し」同様、クスクスには団結と友愛の精神がある。フランスの人権団体や社会運動家たちにクスクスが受け入れられ、イベントの機会によく登場するのも頷ける。市民活動家、そして、文化の多様性を楽しもうとするフランス人たちにクスクスが好まれるのは、ただ単にクスクスが美味しいからという理由だけではない。武器も、ペンも、結構。みんなクスクスを食べたい。



2007年12月19日付日刊『パリジャン』。クスクスを食べるエイズ支援のボランティアたち



クスクスを打つ女性

たとか。

時代が下って一九世紀になると、エキゾチック料理として美食家たちに珍重されてきた様子が窺える。作家ジョルジュ・サンド(一八〇四―七六) 邸の定番料理のひとつだったそう。

一方、大衆料理としてクスクスが定着し始めるのは一九一〇年ごろだ。当時、第一次大戦の外国兵として、あるいは工場の低賃金労働者として本国にやってきた北アフリカ移民が増えるにつれ、彼らが集うパリ十八区のバルベス地区に庶民的な値段のクスクス料理店が増えていった。大戦中は、北アフリカ出身者には、パンではなくクスクスの配給券(三日月印がついていたという)が配られていたそう。

だが、やはり、クスクスがフランス人の家庭料理として浸透するようになった決定的な要因は、マグレブ三国の独立だった。二〇世紀後半、マグレブに住んでいた一〇〇万人ものフランス



フランスではサラダとして食べる人も多い

### クスクスのタブレ風サラダ (4人分) *Taboulé de semoule à la menthe*

クスクス	1カップ
お湯	1カップ
EX ヴァージンオリーブオイル	適量
豆(グリーンピース、ソラマメなど)	カップ1/5
野菜(きゅうり、コーン、パプリカ、エシャロットなど)	カップ3/5
レモン汁	レモン1~1.5個分
ペパーミントとパセリ	適量

- クスクスにオリーブオイルと塩少々を入れて混ぜ、その後、お湯を加え、ラップをして15分ほど放置。
  - 野菜とハーブを細かくみじん切りにし、①と混ぜる。
  - レモン汁、塩胡椒、オリーブオイルを2と混ぜ、完成。レーズン、えび、ナッツ、ハム、パイナップル、トマトなどを入れてもよく合います。
- \* フランスでもっとも好まれ、食べられているクスクスの食べ方で、お総菜屋さんやスーパーの定番料理です。
- \* タブレ(タプルーレ)とは、レバノンやシリアなど東地中海地域で食べられている野菜料理で、本来はクスクスではなくブルゴル(ひきわり小麦)が用いられます。

# 文化遺産としてのものづくり

## マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識

飯田 卓いただ たく

民博 先端人類科学研究部

このコーナーではこれまで、芸能や儀礼といった無形文化遺産をとりあげてきた。この先しばらくは、ものづくりや言語、食など、スペクタクルや舞台に仕立てにくいタイプの遺産をとりあげたい。

### 霧の森のザフィマニリ人

この数年間、マダガスカル山間部で製作されている木彫りを集中的に調査してきた。ザフィマニリという人たちが作るこの木彫りについては、二〇一三年春の特別展「マダガスカル霧の森のくらし」や『月刊みんぱく』の特集などで紹介した。今回は、特別展開幕後にザフィマニリの人たちが直面する問題を報告しよう。たゆまぬ実践をとおしてうけ継がれる無形文化遺産と、そうした実践を可能にする林産資源のバランスについて

考えたい。

この木彫り技術は、交通の便が悪く生活物資が不足するなかで培われてきた。近年増えてきた「よそ者」たちがその価値を見だし、ユネスコが無形文化遺産として認定したが（二〇〇八年）、担い手たちはあまり認定を意識していない。むしろ、日常で当たりまえにおこなわれてきたことが珍しがられて、戸惑っているようにもみえる。いっぽうで、一部の村には観光客が大勢訪れるようになり、才知に長けた人たちはさまざま

な商売を考案している。

### 時計を一五年まき戻す

二〇一三年七月に、特別展開幕後はじめて、ザフィマニリの村を訪れた。来場者が書いた手紙の一部を、ザフィマニリの人たちに届けて紹介するのが目的だった。特別展の成功を報告し、喜びあうなかで、気になる話を耳にした。村のなかに建つ土壁作りの家屋が六〇軒ほど壊されて、代わりに木造家屋が建てられるという。ここでいう木造家屋は、マダガスカルのみならず



ザフィマニリの「伝統的」家屋

ユニークな様式で、ザフィマニリ伝統のシンボルとされるものだ。かつてはマダガスカル中央高地部で広くみられたが、現在

ではザフィマニリ人が限られた地域で伝えるのみである。日本でいえば、各地の茅葺き民家建築のようなものだろうか。

土壁家屋が壊されて木造家屋が新築されることは、ある意味で景観復元につながるだろう。特別展の準備のとき、吉本忍氏（現在、民博名誉教授）の調査団が一九九八年に現地で撮ったビデオを見たところ、木造家屋の割合が今よりもっと多かったことに強い印象を受けた。木造家屋を増やせば、村の景観を一五年前に近づけることができ



新築中の家屋（2012年）

るだろう。その意味で、家屋新築の助成を歓迎する人たちは少なからずいる。

しかし、問題はそれほど単純ではない。木造家屋の新築を間接的に助成するフランスのスポンサーは、ザフィマニリの村々で不要になった木製窓を大量に買いつけ、その一部を七二点もの現代芸術作品に仕立てあげて展示会を開いた。今回の新築助成には、その収益の一部が充てられたのだという。

無形文化遺産である木彫り

技術の結晶ともいえる作品を、まったく異なる芸術表現に仕立てなおすのは、ザフィマニリの作り手に対する冒涇だと個人的に思う。しかしこの点は、展示会の概要を詳しく知ったうえで評価したい。さしあたり問題だと思うのは、短期間に多数の家屋が建てられ、貴重な木材が伐りつくされてしまうことだ。

後でわかったところによると、六〇軒の新築というのは大げさで、じっさいには三八軒の新築と一〇軒の補修が申請されただけだった。しかし、補修が終わった一〇軒と新築中の一〇軒を二〇一四年夏に調べたところ、必ずしも理想的な樹種が建材に使われているとはいえなかった。適当な樹種が使われる場合でも、樹齢が古くないために、昔の家ほど長持ちしないだろうという声がかかれた。

### 形の過度な重視

人びとの日常的ないとなみを

とおして伝わる無形の遺産は、形式や形状の保存だけによって保護することはできない。それどころか、形式や形状だけを保存しようとする、逆に無形なもの継承が危うくなってしまうことすらある。ザフィマニリの事例は、まさしくそのことを示している。ザフィマニリの木彫り技術を支えるのは、その技術を伝える人たち、そして、木彫りの素材として用いられる木材だ。今回の新築助成では、このふたつがずいぶん軽視されているように思う。

人については、家屋に住む人の利便性が軽視されてしまっている。ただし、新築には居住者本人が同意しているはずなので、大きな矛盾はまだ生じていない。いっぽう、建材の問題はすでに深刻だ。新築パブルに踊らされた結果、適当な木材が広範な地域から消えてしまったら、家を建てる技術をどのように伝えればよいのだろうか。



技巧を凝らした木製の窓（撮影・川瀬慈）

## 自分たちの故郷の祭り

主流社会において周縁化された人びとは、音楽や舞踊などを通して自らの居場所を作ろうとすることがある。かれらの実践は、音楽のもつ人を変える力、人と人をつなぐ力について考える機会を与えてくれる。



東京レインボー祭りで踊る、ゲイを中心としたエイサーグループ

### ある祭りの光景

新宿の一地区でおこなわれたある祭り。最後の演舞として、沖縄の「伝統芸能」のエイサーが登場した。演舞者六〇人ほどが二列に並び座るなか、道化的な姿をしたダイサナジャーの二人は、エイサーの始まりに踊られる、その場を清める意味があるという踊りを見せた。それが終わると、今度は色の異なる六枚の布をつるした細長い竿を持ち出し、それを皆に見せるかのように不器用そうにくるくるとまわった。こっけいな動きに観客から笑い声がおきる。しかし、この祭りでのこの六色が示されることに大切な意味があることを、多くの観客が知っているはずだ。

そして、ビルが立ち並ぶ街に、三線さんしんを奏でて歌われる沖縄の民謡と、太鼓の音が鳴り響く。最後の曲「唐船ちゆうせんドリー」では、観客も、沖縄で祝い事などの締めには踊られるカチャーシーを踊り、一体感を生じさせて祭り最大の盛り上がりを見せた。

### 六色の布があらわすもの

一見よくある祭りの光景だが、その祭りの



六色の布を観客に見せるダイサナジャー

語る。先に登場した六色の布は、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）などの性的マイノリティを象徴する旗として世界に広がっている六色のレイボーフラッグをイメージしたものだ。

### 新宿二目が故郷

わたしは、ゲイであることをオープンにしている文化人類学者として、このエイサーグループに参加し、インタビューをおこなったことがある。そのとき印象に残ったのは、じつはこのグループのなかでは、メンバーは「ゲイである」ことを意識することが少ないということだ。それは、ゲイであることを意識させられることなく自然体でいられるということだろう。普段の社会生活のなかで、どこもかしこも異性愛に関する話で満ちているにもかかわらず、異性愛者はそのことに気づかず、自分が異性愛者であるを意識せずにすむように。

この祭りでは、開催当初は、東京の沖縄県人会の流れにあるグループがエイサーを踊っていた。それは、当時の実行委員長がそのグループのメンバーと知り合っていたことがきっかけだったという。その後、二〇〇五年に、そのグループに所属していたゲイのメンバーがエイサーグループを設立し、レインボー祭りで踊るようになった。「ゲイタウン」ともよばれる街で、ゲイが中心となって始めた祭りなのだから、「ゲイ中心のグループで踊りたいという思いがあって」と設立者は

その一方で、イベントで踊るときには、亡くなったゲイの仲間のことを思いながら踊るという人もいたし、LGBTのパレードで踊りながら歩くことで、ゲイである自分を肯定できた気がすると語る人もいた。



東京レインボー祭りのフィナーレ

すなわ ひと  
砂川 秀樹

レインボーアライアンス沖縄共同代表

わたしたちの経済的行動は、もちろん「得か損か」という勘定によって突き動かされている。しかし、だからといって「よいか悪いか」という判断がかかわらないわけではない。近年のブラック企業や食品偽装に対する批判を思い起こせば、すぐにそのことに気付くだろう。新入社員を使い捨てにしたり肉の産地をごまかしたりしてまで利益を追求する企業の話を聞くと、許せないことだと怒りを感じる。この怒りは、商売はこうあるべき、というわたしたちの考え方にもとづいている。しかし、怒りを感じるポイントとその背景にある道徳的基準は、時と場所によって異なるかもしれない。モラル・エコノミーは、こうした他者の経済的公正に対する感性をとらえようとする概念である。

一八世紀イングランドでしばしば起こった食糧暴動を見てみよう。民衆は、たんに腹が減って暴れたわけではない。イングランドでは、生活に必要な穀物やパンを、民衆が市場で安く優先的に買えるようにする規則があった。ところが、「規制緩和」で規則は守られなくなり、飢饉ききんのときも商人たちは食糧を買い占めて値段を釣り上げるようになった。貧しい人たちの生存を優先するという伝統的な義務を商人が果たさそうとしないので、民衆は「公正な価格」を求めて立ち上がったのである。なぜ直接行動に訴えてもよいのかを理由づけるこのような道徳的認識を、歴史学者E・P・トムソンはイングランド民衆のモラル・エコノミーとよんだ。

一八世紀イングランドの事例に似た道徳的認識は、他の時代

損得を越えて

## 人間学の キーワード

# モラル・エコノミー

## Moral Economy

なかがわ おさむ  
中川 理 立教大学准教授

と地域にもあるだろう。政治学者J・C・スコットが二〇世紀はじめに東南アジア各地で起こった農民反乱をモラル・エコノミーとして分析したように、さまざまな研究者がこの概念を適用して自分の事例を考えるようになった。それらの事例には、支配者は被支配者の生存を保障しなくてはならず、もしその義務が守られなければ被支配者は反抗してもよいという考え方が共通してあらわれる。人びとは支配されていることそれ自身に怒っているわけではなく、支配者が義務を果たさないことに怒っている。だから、反乱が表現しているのは、自由や平等よりも「よき支配」を求める保守的ともいえる道徳的認識なのである。

こうして、モラル・エコノミー概念は、経済的公正をめぐる民衆的想像力のかたちを目に見えるようにしてきた。しかし今日では、モラル・エコノミーはこの種の想像力を指すために使われるとは限らない。本来、この概念は「道徳的・な・経済」(公正な経済とは何かの理解)と「道徳的・な・経済」(義務を果たさないから反抗してもよい)というバランスの計算)の両方の意味を含んでいる。ここから後者の意味を強調して、もはや経済とも民衆とも関係しない道徳的認識をモラル・エコノミーとしてとらえようとする研究もある。この場合、例えば、難民申請者の多くは偽装された経済移民なのだから認定拒否してよいが、病気の申請者は人道的見地から認定すべきと判断する時のフランス政府の認識も、モラル・エコノミーのひとつだということになる。概念のこのような拡張が新しい可能性を切り開くのか、本来の威力を損なうのかについては、検討の余地があるだろう。

## 編集後記

本特集を読んで、日本における応援がいかに統制がとれているか、ということに感心した。ファストフード店のマスコット像を勝利を祝うファンらが興奮のあまり堀に投げ込むというような事件もあったが、時おり暴徒と化す欧米のフリーガンに比べれば、日本の応援団は概してお行儀が良いようだ。最近のドイツでは、フリーガンのグループが排外主義を掲げる極右団体と結びついて、都市部で反イスラームのデモをおこない、政治のアリーナにまで進出している。

しかし対岸の火事とは言っていない。「日本人限定」と英語で書いた横断幕を、一部のサポーターがサッカースタジアムに掲げて処分を受けた、というニュースは記憶に新しい。日本人以外が入ると「応援の統制がとれなくなるのが嫌だったから」という動機だったらしい。一糸乱れぬ応援も美しいが、一歩間違えると全体主義に陥る危険性ははらんでいるのである。

さて、年度も替わり、紙面を少しリニューアルした。「集めてみました世界の〇〇」がカラーページに移り、「音の居場所」という新コーナーが始まった。今年度も『月刊みんぱく』を引き続き応援いただければ幸いである。(山中由里子)

2015年3月号「制服の世界、世界の制服」の内容に誤りがありました。下記の通り訂正いたします。

p23の下段、前から3行目  
誤) 娘役トップの演じる  
正) 男役の演じる

●表紙: エールを送る応援団員たち(協力・神戸大学応援団)

## 次号の予告

特集

## モノから生まれたものがたり

## みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引に比べ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

## 月刊みんぱく 2015年4月号

第39巻第4号通巻第451号 2015年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信  
編集委員 山中由里子(編集長) 櫻永真佐夫 河合洋尚  
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 丸川雄三  
編集アドバイザー 山内直樹  
デザイン 宮谷一孝 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人千里文化財団  
印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

### みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

### みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

### みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

